

井戸端だより

第 93 号

発行日：2016年3月22日

発行：くらしの学習会

もくじ

1 月例会報告・会計報告	1
2 月例会報告	2
絆の仕事	8
八十 三つ子	9
短歌十首	10
— 55周年書学院展を終えて—	11
「書く」ということ	13
やっと 少し学んだ「源氏物語」	14
雑感	15
愛媛新聞掲載（東温市議会）・お知らせ		19

2016年、最初の会報「井戸端だより」93号をお届けします。

今年もよろしくお願ひします。

新聞を読み、テレビをみて、いいニュースはないかと探す毎日。

国内外共の動きは混沌としていて不安だらけ。

日本中が桜色に染まる春は「新入学」「新入社員」等々

多くの人たちは期待で胸が膨らむ時期。

この人たちに期待したい。

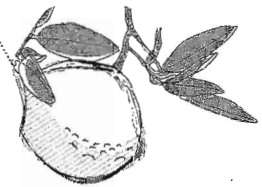
もう何年も我が家で羽化しているジャコウアゲハの蛹が、

今年は庭の何処にも見当たらない。

そのうちに羽化した姿を見せてくれるのではと心待ちにしている。

食草のウマノスズクサはやっと芽を出し始めたところ。

(S・K)





1月12日（火）12時からH宅に於いて、総会及び持ち寄りによる新年会が
 会員6名参加で行われた。

まず、昨年の会計報告・名簿確認を行った。今年度の活動については、

*会報に学習コーナーを入れてはどうか。

*新居浜「あかがねミュージアム」西条「鉄道歴史パーク」八幡浜保内「近代化産業遺産」などの見学。

などの意見が出たが、新年会を行いながら希望など話し合う事にした。

参加者の持ち寄り料理はバラエティーに富んだものだった。

<前菜>生春まき・ビーンズサラダ

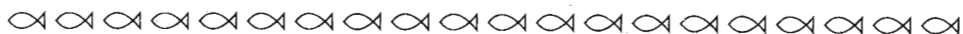
<汁物>しし汁・コーンスープ

<メイン>パエリア・チーズハンバーグ・ゆでたまごの肉まき

<デザート>ティラミス・チーズケーキ・アップルケーキ・大きな苺
 様々な話をし、美味しいものを頂きながらの賑やかな新年会となった。

趣味人のMさんがこの日『つづみ』を持参していて、「新年でもあるし、
 皆さんの厄払いも兼ねた一曲を」と。力強いつづみの音に場の空気が一新し
 心新たな気分させてもらった。その後、皆で『つづみ体験』を楽しんだ。

2月の例会を2月27日 近くのため池でのバードウォッチングを行うこと
 に決め4時過ぎのお開きとなった。 (A.M)



会計報告(2015.1~2015.12)

収入	前年度繰越金	110651
	活動会費7名分	14000
	購読会費12名	12000
	カンパ2名	6000
	利子	8
		<hr/>
		142659
支出	用紙代通常	4040
	切手代	16448
	両面テープ封筒	321
	遠出	
	ガソリン代	4982
	高速料金	10160
	駐車料金	909
		<hr/>
		36851
差引	142659-36851=105808	次年度繰越金

2月例会報告

2月27日（土）予定していたバードウォッチングの案内役のKさんが参加できなくなった為、急遽、松山市小野地区にある『葉佐池古墳』を訪れることに。（愛媛新聞発行アクリート2016年2月号に、『葉佐池古墳』の紹介があり、その美しい写真＜撮影 桜田耕一氏＞に魅せられ、訪れたことも無かった）4名の予定だったが当日一人急用が出来、3名での活動となった。

『葉佐池古墳』は、約20年にわたる発掘調査を経て、平成23年2月国の史跡に指定、平成26年7月「古墳公園」として一般開放となった。

平成4年、通称「小山」と呼ばれる丘陵で未盗掘の古墳が発見された。この古墳は、未盗掘であるだけでなく横穴式石室に木製の棺が残ったままの状態で見られ、全国ニュースでも取り上げられるほど注目された。20年の調査の結果、長さ約41m、最大幅23mの楕円形で、5基の埋葬施設が造られていた。5基の埋葬施設のうち、発掘調査を行ったのは1号石室と2号石室と呼ばれる横穴式石室。石室内には、須恵器のほか、木製の棺が1400年以上経て残っていた。特に1号石室に残っていた人骨には、ハエ（ヒメクロバエ）のサナギの殻が付着していたことから、古墳時代後期の埋葬に伴う儀式の方法などが分かった。（「アクリート2月号」「よみがえる古代の小野ガイドブック」より）

公園内の「ガイダンス棟」では、地域のボランティアガイドの方が展示物の説明をしてくれる。

未盗掘であったため分かった埋葬に伴う儀式の方法は、「もがり（今で言う通夜と類似する）」といい、その時代、10日～一か月の間、遺体と共に生活をし、臭いがしたり、ハエがたかたりし始めたら埋葬を行う。未盗掘だったためその時代の儀式がそっくり残っていたこと、その時代のハエのサナギの抜け殻がある事で、最後に石室の封印後、後の人々に触れられる事の無い状態での「もがり」の完全な姿が発見された事が全国的に貴重なのだそう。ここに埋葬されていた主は、須恵器をつくる長の家系の人々らしく、遺体の足の上には須恵器が乗せられていたそう。

発見時の石室の写真・埋葬物の写真・須恵器のレプリカ・現在の1号石室の映像・「もがり」の儀式をアニメ化した映像など説明を受けながらの見学となった。

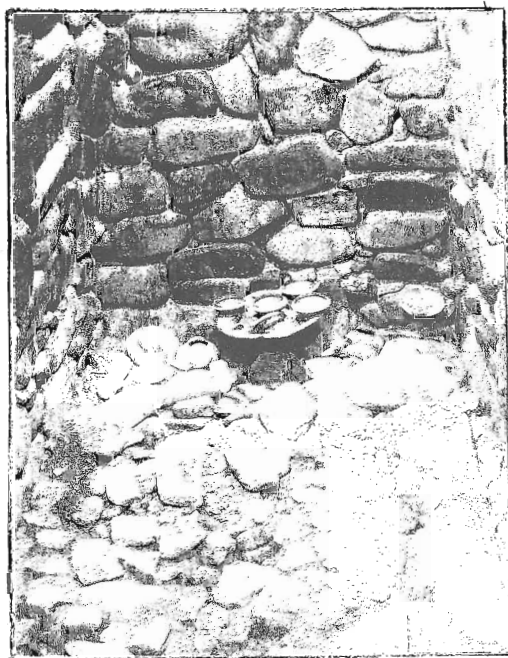
外へ出て、整備された古墳の丘陵を上がり1号石室へ。石室の出入り口に覆い屋を設置。本物の横穴式石室（ほぼ発掘当時のままの石室）には、最後に閉じられた時の状態を複製品で再現されている。墳丘からの景色もなかなかのものだった。隣接する葉佐池では鴨が数羽のんびりと泳いでいた。

下へ降り、ガイドの方からこの辺りの興味深い様々な話を聞かせてもらい、11時30分すぎまで楽しい時間を過ごした。

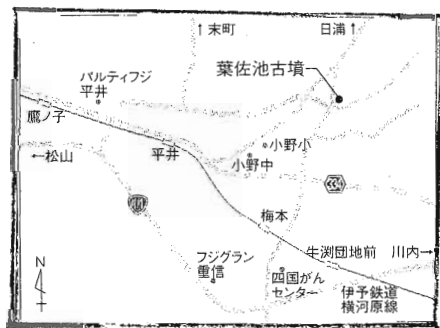
（見学日は、年末年始を除く、土・日曜日・祝日。平日は、松山市教育委員会事務局 文化財課まで事前申込が必要。広場、駐車場などは常時利用可能）



葉佐池古墳1号石室。左は名称由来となった灌漑用ため池の「葉佐池」、その奥には、雪を頂く「石鎚山」1月（松山市）



愛媛新聞発行アクリート2016年2月号より



松山市教育委員会発行 史跡 葉佐池古墳より

この後、12時に予約をしていた川内エリアの民家レストランへ。この日は、
琴の演奏・体験のイベントデーで、buffet式の食事となっていた。立派な
お雛様が飾られ、オーナーやスタッフの皆さんが忙しく立ち働いている。奥
に座っていた琴の演奏者の方が何とHさんのお知り合いで偶然の出会いとな
った。このレストランはマクロビオティック系の料理を提供している。この
日は、デトックス効果を意識したメニューだった。

雑穀米のミニおむすび（きゅうりの糠漬け・緑のカブ漬け・菜っ葉漬け）
大根+かいわれ・紫キャベツ+茹ではだか麦・ニンジン+ミニトマト・ロマ
ネスコ・ポテトサラダ・カブの塩麹和え・焼き葱の味噌和え・里芋フライ・
椎茸+玉葱+高野豆腐フライ・とろろ昆布+あげのすまし汁・リンゴ・キウ
イなど…極力無農薬・有機野菜を使用。動物性の食材は使用せず、調味料も
血糖値の上がりにくい糖類を使用。出された和菓子も特注された物で、砂糖
を使用しない道明寺粉の椿もち+抹茶。すべての味付けは薄味で嚙ごたえが
あり、ずっしりお腹に落ち着く食事だった。

食事の途中から琴の演奏が始まった。なぜか現代風のメロディー「天空の
城ラピュター」の主題歌なども。琴の側へ行き話を聞くと、二本の琴を持参
していて、一本は和音階、一本は洋音階に調律されているそうで、体験は和
音階に取換え「さくらさくら」を習う。楽譜は数字のみが書かれていて、
弦の奥から一・二・三…となり、楽譜の数字の弦を弾けば曲になる。滑らか
に曲が弾ける様になるにはかなりの時間が必要なのだろうが、ぎこちなくて
も曲が弾ける楽しみを体験できた。Hさん曰く、外国人の方にはこうした体
験の評判は良いそうだ。ランチのお客様が次々やってきたので、私たちはお
暇する事にした。

次は、愛媛新聞紙上を賑わせていた『冬ぼたん』がまだ見られるかも知れ
ないと会場の井内「ぼたん茶屋」へ。残念ながら、ぼたん茶屋ぼたん園開園
25周年記念『冬ぼたんまつり』は2月21日で終了していたのだが、園内には
まだ藁で編んだ霜囲いの中に咲いているぼたんがあり眺めているとオーナー
のNさんが出てきて下さり、「中の展示も観てみませんか」と誘って下さった
ので、遠慮なく見せてもらうことに。

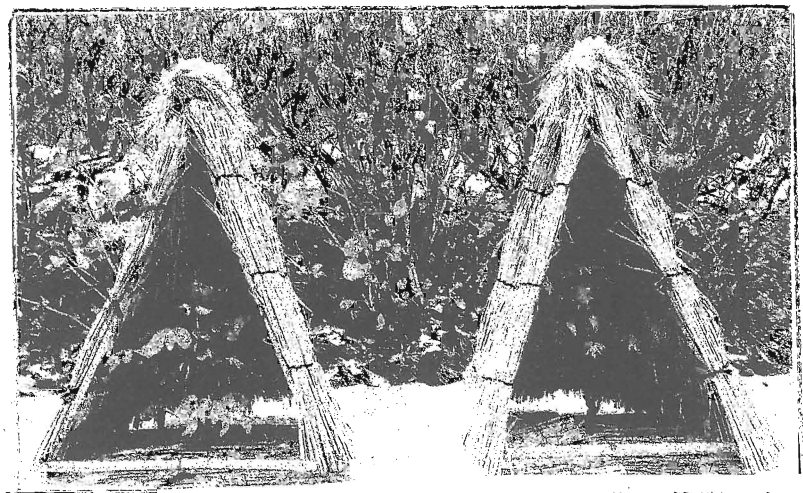
りんとした空気の室内には赤・白・紫などの大輪の冬ぼたんが競い合うように私たちの目を楽しませてくれた。この『冬ぼたん』は、今年の春咲くはずだった品種を-1℃の冷蔵庫で保管をし冬に咲くように調整されたもので、約一年半かけ、栽培特許を持つ島根県にある大根島から仕入れた苗を育ててきた。四国では珍しい初？『冬ぼたん』に、会期中、1500人もの方が訪れ、地域住民も出店を出し祭りを盛り上げたそうだ。

以前、美味しい赤蕎麦を学習会の皆で食べに来たこともあり、「また食事をしに来ます」伝え、井内を後にした。ご厚意で『冬ぼたん』を観る事ができ、Nさんに感謝申し上げます。



丹精して咲かせた冬牡丹を見つめる永井さん

愛媛新聞2016年1月15日（金）より



愛媛新聞2016年1月24日（日）単眼複眼より

盛り沢山の2月例会最後は、川内地区「画夢舎」に於て2月28日まで開催中の『えひめ千年の森をつくる会』の活動写真展を訪れた。

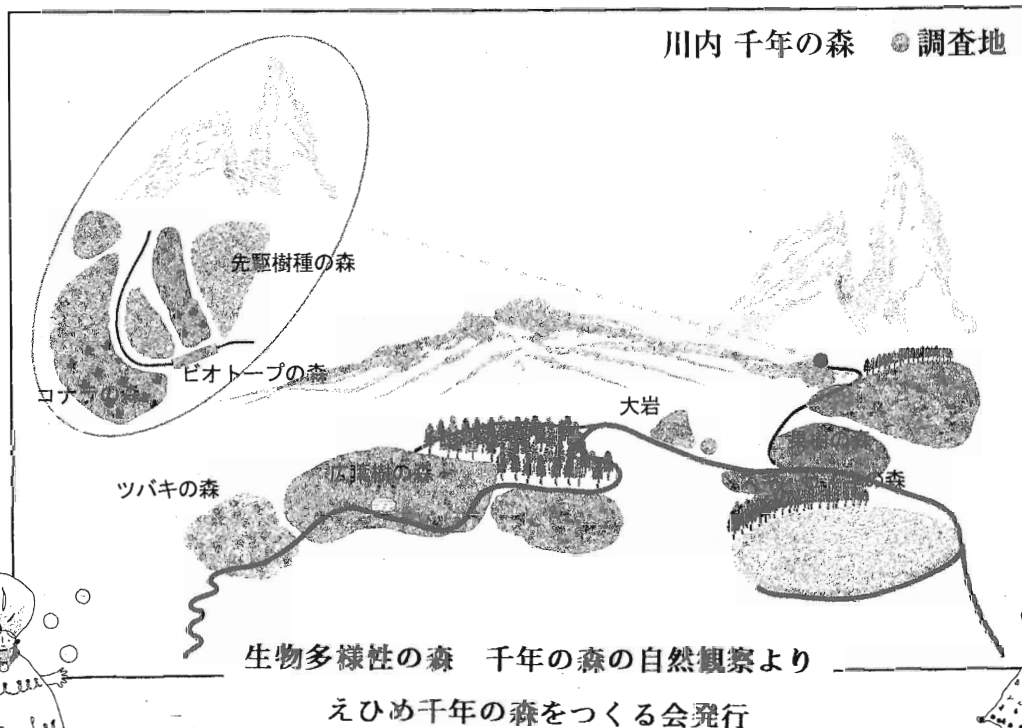
※『えひめ千年の森をつくる会』は2000年に設立。会長が愛媛大学に赴任。それまで君津で行っていた千年の森をつくる活動を愛媛に拠点を移した。君津で行ってきた千年の森をつくる活動の成果として、フィールドや建物がなくても更新を繰り返しながら千年の後まで森であり続けるような森を育みたいという想いを持った人たちが集えば、そこが千年の森になるという確信があったからである。2001年、家族が転居してきて棚田での活動が始まった。そこに、時折、大学生たちが加わり、まもなく地元小学校と連携した自然体験教室へとつながった。(川内千年の森 森林調査報告書より抜粋) ※

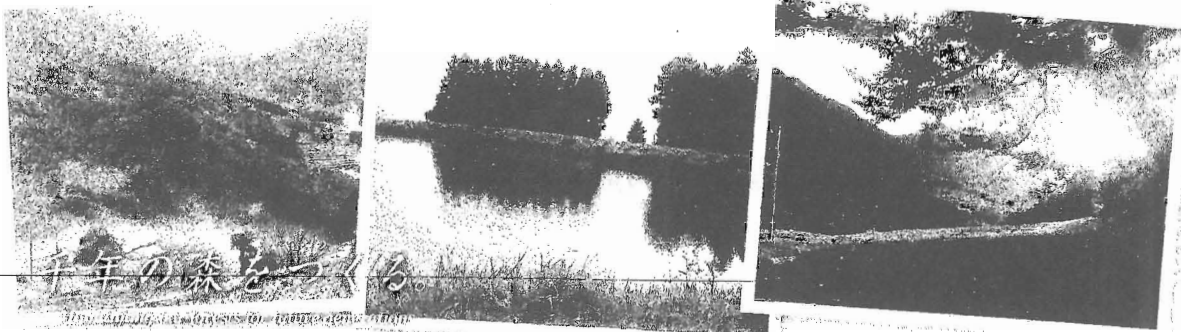
活動の内容は頂いた、えひめ千年の森をつくる会発行「森林の保全 公益的機能を高めるために」のコピーをご覧になって下さい。

展示されていたパネルや用意されていたDVDを拝見し、こうした活動の継続が現在のように実を結んできた事に頭の下がる思いがした。

様々な新しい体験をし、実り多い時間を過ごすことが出来た2月例会は、4時すぎ、お開きとなった。Hさん、あちらこちらへの運転お疲れ様でした。

(A. II)





私たちのめざす千年の森

「千年の森をつくる」とは、現存の森林が更新を繰り返しながら千年後も森林であり続けるようにすることです。したがって、屋久島の千年を超えた杉が生える森林も、全国各地の苗木を植えたばかりの若い森林も、それを守り育てていこうとする人々がいる限り、ともに千年の森なのです。全国各地の森林を大切に思う人たちによって、必要に応じた千年の森がつけられていくことを願っています。

私たちは、

- ① 森づくり
- ② 世界に開かれた木炭学校
- ③ 自然農法実践農場
- ④ 安全な食・農林産物の加工が学べる場
- ⑤ ありのままの自分に出会う場
- ⑥ 未来循環型自給をめざした生活の提案の6つを柱としています。



森づくりの力と気づき

地球環境破壊の状況を知れば、多くの人は絶望的になり、心が不安になります。しかし、下刈りをし、木を植えて、具体的に森づくりをしていると、とても心が安らぎます。今、私たちにできることを少しずつ続けていけばいいのだと自然に思えるようになります。

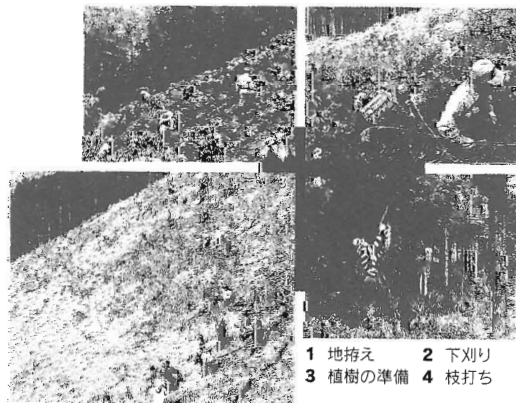
千年の森づくりは、森林や施設がなくても「千年の後まで森林であるようにしていく」という想いを皆が共有していくことによって、いつでもどこでも誰でも可能です。

森林を守り育てる活動にご一緒に一步を踏み出しませんか？身近なことから少しずつ実践していけば、あなたの周りの環境が変わっていくことを実感できるはずです。

会長 鶴見 武道

① 森づくり

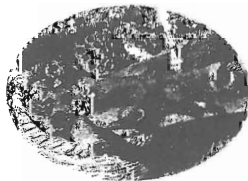
毎月1回、第3土曜日(予定)に、森の活動を行っています。



1 地拾え 2 下刈り
3 植樹の準備 4 枝打ち

② 世界に開かれた木炭学校

炭窯の作り方、炭の焼き方、木炭、木酢液の利用、薪炭林の造成を学びます。平成14年4月に地域の人の協力で伝統的な土窯が完成し、土窯による炭焼き、ドラム缶による簡易炭焼き、お花炭づくりができるようになりました。



竹炭とお花炭



土窯

③ 自然農法実践農場

棚田では有機・無農薬による米づくりを行っています。そこでは田植えや、アイガモの気持ちになった草取り、稲刈り、脱穀などの体験をします。そばの種まきや収穫、石うすでの粉ひきなども体験し、循環型農業について学びます。



④ 安全な食・農林産物の加工が学べる場

有機農業で得た農産物を用いて、玄米菜食の料理や、味噌、こんにやくなどを作り、安全で健康によい食について学びます。林産物の加工では、シックハウス対策として、安全な木造の家を建てたい人、木材供給者、大工がそれぞれプラスになるように家を建てる学びの場を提供したいと考えています。

⑤ ありのままの自分に出会う場

農業や林業の体験をする中から、自分らしさを認め、新たな自分を発見し、今日に満足し、明日を楽しみに待つような生活が送れるようになることをめざしています。

⑥ 未来循環型自給をめざした生活の提案

昭和35年以前は、持続可能な循環型社会でした。今、そのころのように、安全な食を得るために家族で協力して食料を自給することや、環境に負荷をかけない生活を自ら進んで選ぶことは、楽しく価値のあることです。そのような生活の中で子どもたちがのびのびと育ち、真に豊かな生活が実現していきます。

絆の仕事

「舟を編む」という本屋大賞をとった三浦しをんの原作を、映画化した作品を見たことがある。辞書は言葉の海を渡る舟、編集者はその海を渡る舟を編んでいく・・・ということからこのタイトルがついたと聞いたことがあるが、辞書作成は多くの時間と多くの人の地道な仕事の積み重ねだという印象だった。

今回そんな辞書の編纂に執筆協力者としてかかわることになった。数年前に他の辞書で声をかけられたときは、他に大きなプロジェクトの仕事を抱えていて、気分的余裕もなくお断りしたのだが、今回は大変でもお引き受けしなければという気持ちになった。

お声をかけてくださった H 先生とはもう何年のお付き合いになるのだろう。思い返せば 15 年前私の属している日本語教師のグループが、ある出版社の支援を受けて研修会を開くことになって、その出版社からの紹介で来ていただいた講師が H 先生だった。研修会後の懇親会で親しくお話しさせていただき、同じ女性として共感と尊敬の念を抱いた。先生はその後東京の国立大学を定年退官後、放送大学の教授になられ、気に入ってくださった松山愛媛を含む四国地区の放送大学の担当に自ら手を挙げてくださった。そのおかげで、その後放送大学主催の研修会などでも何度も松山に足を運んでいただけることになった。そのたびに懇親会で親睦を深め、その集まりは「まどんなの会」と名付けられた。松山だけに、小説「坊ちゃん」の登場人物からとったということもあるが「まー、どんな会？」と特に内容を定めず、皆で集まっておしゃべりをする気楽な会でもあって、毎回参加するのが楽しみだった。雑談ありまじめな話ありの会だったが、個人的には夫が癌になったときも、先生から励ましていただき感激したのを覚えている。

そんな縁が絆となって今回の仕事につながったのである。放送大学の定年後、最近はなかなかお目にかかることもできなくなったが、毎年賀状ではお互いの近況を知らせ合うのが常だった。昨年 12 月、今回の辞書のお話をいただいた。今年の先生からの年賀状には引き受けたことに対するお礼が添えられていた。そして、覚悟はしていたが、2 月中旬ごろから具体的に仕事の内容と資料がメールで大量に送られてきた。必要な辞書や本を個人的にも手に入れて、今悪戦苦闘しているというわけである。

辞書にはそれぞれ特徴がある。今回の辞書もその特徴を生かすため、あちこちこまごまと調べる事が多く、なかなか担当の分も進まないが、絆によって与えていただいた仕事によって、今まで関わってこなかった分野や人とのつながりが生まれ、新たな絆が生まれるに違いない。何年先になるかわからないが、辞書として日の目を見る日を夢見て、本務のほかには今はこの地味な仕事を地道にこつこつと頑張っていきたい。(T.H)

八十 三つ子

私には、10歳頃に80歳になる祖母がいた。

私は、今年10月で82歳になるから同じ年代になるが、思い出がいっぱい残っている。

一日の大半を寝ていて、食事になると孫の誰かが「おばあちゃん、ご飯ですよ」と耳もとで大きい声で知らせると、やっと起きてよちよち歩きで食卓を囲み、入れ歯を入れて、黙々と食べていた。トイレは自分で行っていたが、歩く度にちよろちよろと尿が出て、その後を母が拭いて歩いた。私が母に「しっかりしていたおばあちゃんなのに」と言うと、『六十 三つ子』という教えがあるのよ」と。60歳になると3歳の子どもと同じに思いなさいと教えてくれた。この言葉には大切な人間愛があると思う。人間いつ迄も元気ではられない。3歳の子とってお世話したら、お世話する人もされる人もいやな気持はしないという優しさが込められている。

祖母は、明治2年生まれだったので、学校へ行かなくてもよかったです。文字は読むことも書くことも出来ず、それでも料理や縫い物は出来ていたので結婚し、子どもも産み育てていた。

その子どもの一人が父親で、小学校しか行っていなかったが、文字もきれいに書けたし、時間があれば本を読む人だった。60歳の時、肺癌を患い『六十 三つ子』になる事もなく子育て中に亡くなったので、残された子どもや母親は苦勞したが、99歳迄生きた母親は、80歳でまだ姉の家の手伝いや近所の子どもの子守りや、縫い物、編み物も出来ていたので、今の自分を見ると情けなく思う。

一昨年、脳梗塞を患ってから、10メートルから始めた歩行も、今では杖をつけて1キロメートルは歩ける様になり、毎日の仕事のように11時になると川の土手へ出て、目標の所迄歩けたら、よく頑張ったと自分を励まし帰って来る。昨年は後遺症が残り意欲がなく一日テレビ人間になっていたが、『八十 三つ子』ではあまりにも悲しいので、今年になってテレビの料理番組を見て、同じ様な物を作って、楽しみが一つ出来たと、自分を明るくする様になると、生きていく元気が出来て来る様に思う。

こうして文章を書くことも、もう書けないと思っていたのに、文字も書けるし過去を思い出し、父母への感謝や、終戦当時の貧しさから、今の生活の

幸せを思うと、『八十 三つ子』ではいられないと思う様になった

昼の弁当を配達して頂き、清掃や草引きも手伝ってもらい、一人では生きていけず、皆に支えられての 80 歳代を生きることになるが、女性の平均寿命が 86 歳と言われる時代、何とか、自分の事は自分で出来る様に健康寿命を保ち、ゴールがどこ迄か誰にも分からない人生であるが、自分で納得出来る人生を歩み続けられたらと思っている。

(Sa. K)

短歌十首

- ・藤の豆。パチンと弾け飛び散りて 褥となるや虫達の冬
- ・初春の盆景つくり松に竹 梅南天と鶴亀を添う
- ・鉢上げの観音竹は濃い緑 葉を丁寧に拭きてぞ終わる
- ・日めぐりの格言読みて庭を見る 時雨のあかりて秋冬木立
- ・月別の暦は残り一枚に 垣の「山茶花」へなへなど散る
- ・胡蝶蘭五年育み茎伸びて 蕾疎らに 白花二輪
- ・初詣で早く済ませて 熱々の「たこ焼き」求め
ハホハホと喰う
- ・盆梅の白の蕾は膨らみて 孫「恵方」向き
海苔巻きを喰む
- ・盆梅の白一輪と紅二輪 着けたる苔の緑は映ゆる
- ・盆景に「寒水砂」撒き 枯れ水の流れ現し
「いおり」を置きぬ
(A.N.)

— 55周年書学院展を終えて—

《新春の書学院展搬入日

てら
天空の松山城—瀟洒なり》

毎朝 何よりも始めに、家中の窓を開けた時に、新しい生命の風を感じる
様な—

二之丸庭園の裾に広がる公園の清冽な空気の中を爽々と白い息をはきなが
ら、愛媛県立美術館へ……
いよいよ今日は作品の搬入日です。

半年の間 書の友・一人ひとりと向き合い、文字どおりプロセスを我なりに
味わいかみしました。

大筆で思いっきり、一文字に心魂こめた人。

ネット検索して出会えた感銘の熟語に精神こめた人。

276文字の一文字ひと文字に静謐な心で、“無”の境地を細字の世界でかみ
しめた人。

共に真摯にとり組んできた月日の時間を思い返す時、心熱くなります。

《書友との深き絆を想いつつ

粗相なきやう“軸”飾りゆく》

どれもすべて、その書にふさわしい上品な軸装に仕上がっています。

(1F・2F・3F・全六百余点)

私は自詠歌を、全紙に“逆勝手”のちらし書きです。

《夕ぐれの風もらひゆく道の辺に

高砂百合の静のひといろ》

いつもながら、未来への大きな課題をのこしたまま、軸装丁にずいぶん助けられた作品になりました。

すべて軸装。展示完成後は、フロア毎に原風景を思われる様な嵯峨御流とのコラボレーションです。

《嵯峨御流・青竹に春花あしらひて
書展フロアに相乗効果》

静なる墨といけばなの融合に、フロアは無限に広がり、宇宙の懐に包まれて侘っている様な気持ちになりました。『融通無碍』の世界を感じた一瞬でした。

ある日の午後の

一作、一点を丁寧に、お好きな書をみつけられながら、万葉がなを解説されるS女史と、ご一緒の鑑賞も忘れられない思い出です。

御多忙の中、御来館いただきましたお一人おひとりに深謝でございます。そして、なによりも思いをあらたに致しましたことは、書学院の主幸と一丸になられての役員・先生方への感謝と尊敬の念を一層深くした55周年書学院展でございました。

持ち帰りました作品わが軸装も、わが家の床の間に、もうすっかりなじんでおりますけれど、ながめる度に、大きな反省と課題がひしひしと胸にしみ入ります。

思いなおしながらー

これからも、書友と共に過ごすひとときを、より一層大切にしながら、あらたな未来に向かって、楽しみながら、『書の和』の広がりや深まりゆくことを切に祈る思いでございます。

ー深謝

(T.N・)

(2016.1.13~17)

「書く」ということ

朝一番の日課は新聞を読むこと。夜明け前の4時頃「ドドド・・・」というバイクの音が止まると「カチャン」と郵便受けに新聞が配達される。新鮮な空気を吸い、空を見上げ今日もいい天気になるといいなと思いながら新聞を持ち込む。

朝食の支度をするまでの1時間、新聞に目を通す。テレビや新聞のニュースを話題にしながら夫と二人の朝食。そんな、緩やかな日々を過ごす1月半ば、夫が「日々の歳時記・夏生一暁（編著）」を買ってきた。「私も読みたい」と二人がいつでも読める場所に置くことにした。

その時、もう一つのことを思いついた。最近、家にいることが多くなった時間を利用して愛媛新聞のコラム『地軸』を、書き写してみよう。

このコラムは社会情勢や愛媛の出来事、風物などを題材に筆者の主観を交えながら綴り、1946年3月11日から続いているという。「フーンなるほど」と、毎日興味を持って読んでいた。早速、愛媛新聞社が出している『一字一句地軸 愛媛新聞1面コラム書き写しノート』を買ってきた。

1日分は見開き2頁で580文字、原稿用紙形式になっている。それを埋めるには、30分近く要する。活字をみながら升目を埋めていくうちに、なんと日頃あいまいな漢字を書いていたと気付かされた。小学校で教科書に新しい漢字が出てくると、先生が黒板に大きく書いた文字を読み、書き順と共に画数・部首を覚えていった。この基礎が大分崩れている。大人になると楷書、行書、草書へと略字になる。それはそれでいいとしても、せめて、書き写しをしている間だけでも、文字を正確に書くことを心がけようと思った。2/21の新聞記事によると、『常用漢字手書き細かい違い OK「とめ」「はね」など 文化審議会漢字小委員会は常用漢字では、さまざまな字形が認められることを解説した指針案を大筋で了承した』とあった。

今は、手紙を書くにしても文書を作るにしても、パソコンに頼りっぱなし。ノートの表紙には『地軸』の書き写しを毎日続けることで ☆社会の動きが良くわかる ☆文章の読解力や構成力が身につく ☆集中力が身につく ☆脳の活性化に役立つ ☆漢字や言葉を学べる」とある。良いことづくめ だが・・・。

二つのことはなかなか実行できず、「日々の歳時記」の私の葉は、2月13日に挟まれたままになっている。

(S. K)

やっと 少し学んだ「源氏物語」

京都府立図書館に入るやすぐ入口に、「源氏物語」のそれは各分野からの多種多様の夥しい研究書・現代語訳、20数ヶ国語の翻訳等、広い書架をびっしりと埋める。一冊の書からかような波及効果を見ることは、世界に類をみないと。さすが文化都市京都である。

「紫式部と寂聴—出家について—」を書こうとずっと思っていたがこの私に何が書けるのだろうか。やはり私には「源氏」を語る資格も何もないということを知った。

『紫式部』は世界五大文豪に数えられる唯一人の女性である。今日ご存命ならば確実にノーベル賞作家なのである。

かの浩瀚な一作をもって、或る日、堀川通りの紫式部墳墓を訪ねた。少しばかり盛り上がった土墳が、ひっそりと人家の間に、土葬のままに千年近くが流れていた。元は雲林院という寺領にあったが、寺の移転が行われ、そのままに残ったものであろう。

- ・古への墳墓の下に「源氏」書く『紫式部』は横たはりある
- ・世界最高峰の作家の墓前に私はいる何を捧ぐべき

その隣に並ぶ相応しい人物『小野篁』の土墳が『式部』のそれと直角に交わっていた。『紫式部』が結婚し、間無しに死別した夫『藤原宣孝』の墓ではない。生まれた娘『賢子』は、閨秀歌大貳三位である。

『紫式部』は土の中に低くひっそりと冷たい雨を受け、積もる雪の下に幾星霜。せめてもと、後日私は紫の花を手向けることにした。

源氏物語千年紀記念「源氏物語国際フォーラム集成」のドナルド・キーン氏の記念講演で彼はこんなことを語っている。

「1940年、ヨーロッパで戦争が拡大した。反戦主義者だった私は新聞を読むことすら憂鬱になり、悩む一方でしたが、そんな頃、まったくの偶然に、「源氏物語」を発見したことで救われた。戦争のない美しい文学に広がる世界に、心を癒され、これが私を生涯の仕事へと導くのです。そして癒されたのは私一人ではありません。「源氏物語」は日本から世界への最高の贈り物でしょう」と。

京都に住んで、「万葉」をザッと読みながら「源氏」が何たるかを捉えることが出来、ほんの少しながら進歩したのだと。

(M・D)

雑感

大きすぎる気温の変化に振り回されていますが、家から見える向こう岸の山肌のあちこちで山桜が開花し微笑み始めています。綾南川上流の吊橋近くは、声をたてて笑っている頃かもしれません。岸の菜の花が映りこんだ川面は煌めき、子育て中でしょうか、鳥たちが忙しそうに飛び交っています。蝶の姿も随分と増えました。木々の硬い冬芽もほどけ、柔らかい若い葉を見せ始めています。お隣のエノキの新芽はまるで桜の蕾の様です。裏の木立ではゴヨウアケビの花が咲き、トウネズミモチが蕾を付けています。足許では小さな花たちが咲き揃い、先日、土手で初めてアマナを見つけ、その可憐さに暫く釘付けになりました。梅が終わった町内はツバキ、コブシ、モクレン、ハナモモ、オウバイ、ジンチョウゲ、ヒュウガミズキ、ボケなどの花々に包まれています。

心浮き立つ春。なのに、今年もあの日がやって来ました。

2011年3月11日。そして12日。

あの日、宮崎県北部の延岡城跡公園のヤブツバキ自生群を楽しんだ帰りの車の中で大地震の第一報を聞きました。あれ以来、遠出をするのが怖くなりました。我が家が遠出すると何か良くないことが起きてしまいそうな、そんな気がしてしまうのです。

何気なく5年目、と言ってしまいますが、被災された東日本の方々、そして直後だった為か取り上げられることすら少なかった長野の方々にとって心身ともに切れ目ない御苦労の日々が続いていらっしゃることを思うと言葉を失います。

震災直後の瓦礫の山は撤去され、道路や宅地が整備されている様子を見ると、数年前に出かけた五木で見た何処か違和感のある街並みの事を思い出してしまいます。山里の小さな町に真新しい公共の建物が立ち並び、周りの風景との距離感に落ち着かない感じがしました。ダム建設によって街が水没し新しく街創りされたと知り、立派なのに、どこかしら、もの哀しい雰囲気を感じました。

山を削り、かさ上げされた土地が心通う街になるには途方もない年月が必要なのでしょうか。せめて、造成された土地が一昨年の広島市の様な災害に見舞われないよう祈るばかりです。

それでも、原発事故さえ無かったら、もっと早く復旧できたに違いないし、今なお避難を余儀なくされている方達の数も大幅に少なかったに違いないと思えてなり

ません。

除染等によって出た低レベルの汚染ゴミを入れた黒いフレコンバッグが仮置き場に累々と並ぶ様は異様です。

汚染水対策はまだまだ道半ばです。

アルプスはトラブルばかり多く、高濃度の汚染フィルターは日毎に増え続けています。

地下水流入を阻むための凍土壁は一応出来上がりましたが山側、海側どちらから凍らせるか結論は出ていないようです。

その間にも汚染水を入れた容器は敷地を埋め尽くそうとしています。

長い間、認める事すらしなかった炉心溶融。融けた核燃料が冷やされて固まった超高レベルの汚染デブリは未だ存在場所すら明確には判ってはいませんし、取り出し方に至っては漸く研究が始まったにすぎません。デブリの取り出しが始まり、原発建屋の解体が始まった時、いったいどれほどの超高レベルの汚染ゴミが産まれてくるのでしょうか。背筋が寒くなります。

現場の作業員の方々の被曝線量は増えるばかりですし、心身ともに疲労がたまる一方です。

強制的に避難を余儀なくさせられた方々の避難指示解除区域が増え始めています。帰らないと決断した人も少なくありません。政治家の中には、補助金を出しているから帰らない人がいる、補助金を減額乃至は打ち切ってはどうか、などという乱暴な発言をした人が居ると聞きます。とんでもない発言です。好き好んで故郷から出て行った人たちではないのです。5年間という年月は子供たちを青年へと成長させ、新しい土地で新しいつながりが生まれるのに十分過ぎる時間だったのです。

資源の少ない日本にとっての“夢のエネルギー”だと喧伝され国策として進められた原子力発電。まさしく“夢”だったのです。到底、人間が扱える代物ではなかったのです。そろそろ“夢”から覚めなければ、と思います。そして、厳しい現実にも目を向けなくてはならない時が来ています。

ひとたび事故がおこれば、なす術さえない原発。

事故が起これなくても増え続ける処理できない使用済み核廃棄物。

そこで考えられたのが核燃サイクルです。

使用済み核燃料を再処理し、燃料を取り出せば、エネルギー資源の少ない日本にとって安定供給が出来る上に、核兵器に転用可能なプルトニウムを減らすことが出

来る、使用済み核廃棄物も減らすことが出来るので一石三鳥、という訳です。

しかし、高速増殖炉は事実上破綻しているとしか思えず、机上の空論、絵に描いた餅だったようで機能しているとは言い難い状態です。

国内での再処理がトラブル続きであることから、フランスからとてつもなく高価な MOX 燃料(1 本 9 億円超とも言われています)をプルサーマルの為に輸入し、フクシマの事故では放射能汚染を拡散させた現状を見ると、安価でクリーンな原発、というのは幻想にしか過ぎない、と思わざるを得ません。

即刻、原発を手放す決断をすべきです。

大津地裁が福井県に隣接する滋賀県の住民の訴えを認め、稼働中の高浜原発運転差し止めの仮処分を決定したことは画期的だと拍手を送りたい気分です。川内原発・伊方原発・玄海原発に囲まれている宮崎県にも発言権が与えられるかもしれないと思うと少し嬉しくなります。

4 月から始まる電力自由化。

オール電化住宅という愚かな選択をしてしまった我が家は、せめて原発で発電した電力からの卒業を願っていました。しかし現段階では、再生可能エネルギーによる電力会社は見つかりません。

昨年末パリで開かれた気候変動枠組条約第 21 回締約国会議(COP21)では今世紀後半までには地球温暖化ガスの排出をゼロにするという採択をしました。想像できないほどの厳しい約束です。でも、そうしなければ地球は持続できない所まで来ていると言います。

それでも、政府は観光立国の姿勢を変えようとはしません。日本は島国です。日本に来るためにどれほどの温室効果ガスが排出されているのでしょうか。

先日、テレビで氷温熟成した豚肉の美味しさを紹介していました。北国の雪中キャベツからヒントを得たと言います。美味しいでしょう。でも、電気はいくらあっても足りません。雪の中に野菜を貯蔵するのは生活の知恵であって美味の追求ではありません。地元の旬のものに美味を見出してこそ、です。

快適を手放し不便を受け入れる覚悟無しには達成できない約束です。

科学で自然を制御しようとする傲慢さから抜け出さなくては、とも思います。

生涯学習の「書道教室年度末昼食会」で山野草のお料理を頂きました。

食材はカラスノエンドウ、スズメノエンドウ、タネツケバナ、ツワブキ、シラネセンキュウ、イタドリ、セイタカアワダチソウ、ヨメナ、カシノミ、カンゾウ・ツバキ、スマレ、ナバナ…に少しの栽培野菜と自家製ベーコン、綾採れのエゴマのドレッシングと小麦の食感が楽しい雑穀米。

手間をかけて下ごしらえされたお料理の数々。春の息吹を丸ごと頂きました。カシノミコンニャクは甘くない醤油餅のようでした。イモコンニャクと共に自家製味噌で作った酢味噌をたっぷり添えて2種類のコンニャクの違いを楽しみながら頂きました。真赤なツバキの天婦羅は見た目にも鮮やかです。濃い紫のスマレと黄色いナバナを封じ込めたゼリーは万華鏡の様でした。

これからの季節、1年分のクサギ菜を採り、保存するのに大忙しだそうです。クサギ菜ご飯、お浸し、此方に来て大好きになりました。

彼女ほどでは有りませんが、先日の我が家の夕食の野菜は庭で採れたフキノトウ、ツクシ、ツワブキでした。フキノトウは天婦羅と蔘の薑味噌もどき。ツクシとツワブキの葉は天婦羅。ツワブキの茎は水炊き。ツワブキの若い葉の茶色の産毛を指先でこすりながら水で流すと信じられない位鮮やかな碧色が浮き出てきます。

我が家のすぐ傍の橋と川原に出かけるのが、最近の私の日課です。

友人から、川原で水鳥を見ている、と聞いて、川原に興味を持ち始めました。その後、「綾の自然と歴史を楽しむ」の講師の先生から我が家の傍の橋からヤマセミが見える、と伺いました。先生は車から見える、と、おっしゃったので、私でも橋から目を凝らせばいつか出逢えるかもしれない、と思いました。

幸運は意外と早くやってきました。川に突き出した枝先にハト位の白っぽい鳥がとまりました。急いでシャッターをきり、拡大してみると遠くてピンボケですが確かにヤマセミでした。頭部の立派な冠羽が誇らしげです。

橋の上空では猛禽類が恋の鞘当てを繰り返して、大木の葉陰ではつがいでしょうか、二羽が寄り添ってとまっています。

叢では、ツボを横たえたような草の塊の傍に小さな鳥が佇んでいました。

足音に驚いて飛立つカルガモの翅の青の美しさに見惚れました。

2月、愛媛での我が家を支え続けて下さった方が急逝されたことを知りました。信じられません。優しい笑顔を忘れません。ご冥福をお祈りします。(K.O.)

2016年(平成28年)3月9日 水曜日

荒廃農地減少へ
経営法人化支援

理事者

〈東温市〉(8日・定例)佐伯正夫、渡部繁夫、安井浩一、大西勉(以上無所属)近藤千枝美(公明)の5氏が一般質問した。

農地を集約する集積率が09年度と比べ5・5%増の19%となったと説明。今後は農業経営の法人化を支援する考えを示し「法人化で体力を付けた組織が農地を集約化することが荒廃農地の減少につながる」とした。

渡部氏は、荒廃農地などの農業対策について市の見解をたずねた。理事者は、2015年度調査で担い手に

課後や夏期休業中、希望者を対象に市内中学校が学習相談や補習を行っているとした上で「他自治体の取り組みも参考に実情に合った効果的な事業整備を検討したい」と述べた。

大西氏は、新市建設計画に基づく市総合保健福祉センター建設について「現在ある施設を有効活用すれば事足りる」と再考を求めた。高須賀功市長は「センター建設検討委員会からは財政状況が厳しい中、増える健康と福祉ニーズを効率的に提供するためには機関を統合するべきだとの結論をいただいた」とし、計画を進める考えを表明した。

市クリーンセンター

地元と再延長協議開始

〈東温市〉(9日・定例)山内数延(無所属)森真一(共産)両氏が一般質問した。

山内氏は、地元との協定で延長稼働の期限が2017年3月末に迫る市クリーンセンター(山之内)の今後の方向性をたずねた。理事者は、稼働の再延長を地元へ申し入れ、協

議を開始したと説明。将来については「解体撤去や機能集約など総合的な見極めが必要。長寿命化による徹底的な施設活用と並行し、民間処理施設への焼却処理委託を協議したい」とした。

森氏は、国民健康保険(国保)の広域化は抑制を招くとして市の対応を問うた。理事者は「国保広域化の大枠の考え方は示されているものの、制度設計の詳細部分は現段階では把握できておらず、国保税についても詳細は未定。賦課徴収や保険給付、保険事業などはこれまで通り市町が行う事業として残るので、適正な執行に努めたい」と答えた。

2016年(平成28年)3月10日 木曜日

4月例会

4月4日(月)

～場所・内容は未定～

くらしの学習会では、随時会員を募集しています。

活動会員 2,000円/年 購読会員 1,000円/年

振込先口座番号(郵便局) くらしの学習会 01610-5-21026

問合せ先 TEL/FAX 089-964-6956

E-mail: kt-hayashi@nifty.com